

行基供養堂か 円形建物跡

奈良市の菅原遺跡で、8世紀中頃に建てられた円形建物の遺構が見つかり、奈良県と元興寺文化財研究所が20日、発表した。奈良時代には八角形の建物はあるが、完全な円形の木造建築は類例がなく、同時代の高僧・行基の供養堂だった可能性が高いとしている。

建物の遺構は、外側に直径14・5メートルの円形に柱穴が15か所（推定16か所）確認され、内側にも土台とみられる石材を抜き取った痕跡が、直径9・5メートルの円形に連なっていた。建物跡を囲む約40メートル四方の回廊や塀の遺構の一部も見つかった。回廊は格式の高い施設に設置され、重要施設だ

奈良・菅原遺跡で出土

菅原遺跡で見つかった円形建物の柱穴。内側にも石材を抜き取った痕跡が確認された（元興寺文化財研究所提供）

つたとみられ、出土した瓦や土器の様式から、行基の没後間もない750年前後に建立されたと考えられている。発掘現場は、行基が没した菅原寺（現・喜光寺）から1キロ近い。すぐ近くでは、1981年に行基に関連する寺院「長岡院」と推定される建物跡が見つかっており、円形建物はその関連施設とみられる。

750年前後建立 類例ない「円形」

高台から東大寺を望む場所にある。円形の建築物は、故人をまつる「廟」の性格をもつとされ、同研究所は遺構が「行基の供養堂」跡の可能性が高いとみている。発掘は宅地開発に伴い遺跡

他に例を見ない「円形」の建物跡。行基の業績を記した平安時代の「行基年譜」にも記載がない特異な建築物がなぜ建てられ、その様式にはど

ういう意味合いがあるのだろうか。円に近い八角形の建物には「八角円堂」がある。奈良時代の法隆寺・夢殿（奈良県斑鳩町）や、鎌倉時代に再建された

内の1960平方メートルを調査。現場は保存されず、現地説明会には行わないが、調査結果報告は同研究所のホームページに掲載している。

栄原（とく）・東大寺史研究所長（古代史）の話「時期的にも場所的にも、行基の供養堂がふさわしい。行基が率いた集団には、技術者や裕福な豪族もあり、建立に関わったのではないか」

興福寺・北円堂（奈良市）などが代表的だ。聖徳太子や藤原不比等ら、有力者の供養のために建てられたとされる。

奈良文化財研究所の箱崎和久・都城発掘調査部長（建築史）は「中国の隋や唐の都には円形の建物があった。行基を慕う技術者たちが、留学生らから得た知識をもとに造ったのではないかと推測する。一方、平安時代以降に建てられた円形の建築物に「多宝塔」がある。根来寺（和歌山県岩出市）などが有名だが、円形は建物の上部だけで下層部は方形だ。

しかし、今回発掘された柱穴などから、建物は下層部も円形とみられ、滋賀県立大の佐藤亜聖教授（考古学）は「成立過程がわからなかった多宝塔の原形の可能性もある」と指摘する。



行基 668〜749年 仏教の布教のかたわら、各地で架橋や築堤、新田開発などの土木事業、社会活動を進めるなど民衆の人気が高く、「菩薩（ぼさつ）」と称された。当初は朝廷の弾圧を受けたが、やがて聖武天皇の帰依を受けた。東大寺の大仏造立の勧進に起用され、日本で最初の大僧正（僧侶の最高位）に任ぜられた。



建物の復元イメージ図（元興寺文化財研究所提供）

さらに別の見方もある。「古代インドのストゥーパ（仏塔）に近い感じがする」と、鈴木嘉吉・元奈良文化財研究所長（建築史）は語る。鈴木氏は、中央部分に柱の痕跡がなく、日本的な建築ではないと指摘。「上部構造を知る手がかりはほとんどないが、ストゥーパが影響を与えた可能性はある」と推測している。